

バウハウスに関する論考 その6 バウハウスの舞台工房

正会員 ○新藤 真知*

舞台工房 反バレエ 抽象図形
オスカー・シュレンマー 旧学生アトリエ 構成主義

バウハウスの舞台工房と聞くと奇異な感じを与えるかも知れない。バウハウスは造形学校であって舞台とは何ら関係がないと一般的に思われているからである。ワイマールにバウハウス校が開かれ、その教育プログラムの基礎を作ったのはヨハネス・イッテンであり、学生は最初の半年間、予備課程で基礎造形の実技と概念を学ぶように仕向けられた。グロピウスが掲げたバウハウスの理念は、よく知られているようにあらゆる造形芸術の統合としての〈大建築〉であったが、イッテンの教育理念は祝祭・労働・演劇というキーワードで表明された。だが当初からバウハウスに演劇ないしは舞台の授業が展開された訳ではない。開校後二年を経た 1921 年になって、イッテンの提案で画家ローター・シュライヤーが招聘された。シュライヤーは、当時前衛芸術の交差点であったベルリンの画廊「シュトルム」を活動の拠点とする人気画家であり同時に前衛舞台芸術を標榜する演劇人でもあった。因みにパウル・クレーも「シュトルム」の画家のひとりである。シュライヤーは着任すると直ぐに仕事に取りかかり、最終的には創作劇『月劇』という前衛舞台を学生たちと共に作っていくが、それが上演されることはなかった。練習に練習を重ねた挙句、学生たちの激しい抗議に会い試演が大失敗に終わったからである。そして数ヶ月後にシュライヤー自身が学校を去らねばならなくなった。もともとは壁画工房及び彫塑工房の指導者であったオスカー・シュレンマーがシュライヤーに入れ替わって舞台工房を指導し始めたのは 1923 年のことで、工房が解散する 1929 年まで責任者であった。シュレンマーの眼は、舞台芸術というよりむしろ舞台上の形態に注がれた。彼は既に『トリアディッシェ・バレエ』を 1914 年頃から考案し、1922 年にはシュトゥットガルトで上演していた。『トリアディッシェ・バレエ』(三連のバレエ)とは、基本形態である丸・三角・四角といった抽象的な衣装(衣装というよりオブジェ)を全身にまとった踊り手が、不自由な手足で簡単なパフォーマンスを演じるものだが、ストーリーとしては、最初は滑稽な身動きから荘重な気分を経て英雄的な領域へと登っていく。それはシュレンマーが 1922 年のカーニバルで披露した『人形の小部屋』同様、工業技術社会へのアンチテーゼとしての「反ダン

ス」を底辺に据えた、しかし形態(フォルム)の基本的要素を人間や空間といかに調和させるかの新しい世界観の提案でもある。端的に言えばバウハウス建築の空間理念の具体的な実験でもある。さらに言い換えるなら、初期バウハウスにおけるイッテンの神秘主義的、有機的、ドイツ表現派的な路線から構成主義へと軌道修正した同校の、必然的な教育方針の転換を舞台工房もまた結果として踏襲した事情を物語っていると云えよう。舞台芸術とは、シュライヤーの大仰な云い方を借りれば生命全般の宇宙的反映とでも呼べるであろうが、シュレンマーは逆に、時代の科学技術信仰へのパロディとしてぎこちない身振りの無機能的「反バレエ」をベースとし、基本的幾何学形態を舞台に載せることで新しい空間すなわち新しい住空間のヒトとモノとの調和を追求したとも云えよう。それがバウハウス・ダンスを生んだ。

バウハウス・ダンスとは、空間・形態・色彩・音響・動き・光の各エレメントを取りあげ、舞台上で単純なパフォーマンスを繰り返すものである。従ってそれは表現を目的とした従来の踊り(舞台芸術)ではなく、各エレメントの意味を視覚化する、更にはそこで演じる演者自身が実体験する時間と空間が重要性を帯びる。2014 年以来、毎年筆者が同行講師を務めてきた「バウハウス・ツアー」の意味がそこにある。デッサウ・バウハウス財団学芸員で現在バウハウス・ダンスの世界で唯一の研究者であるトルステン・ブルーム博士が主導する「バウハウス・ツアー」は日本のデザイン専門学校の生徒を対象に行われてきたが、おおよそ 10 年前から同博士はモスクワ、ブラジル、イギリス、中国、台湾、韓国の教育機関からの招聘に応じて実験的バウハウス・ダンスを指導してきた。日本のデザイン学校のツアーでは、年々、彼のカリキュラムは工夫が施され、例えば最初の到着地ベルリンで彼らに工芸博物館(ベルリン・アートフォーラム)を見学してもらい、そこで一人一人がお気に入りの展示物一点を選び、具象的なデッサンから徐々にデフォルメして幾何学的抽象を描いてもらう。既にその時点で彼らは戸惑う。その戸惑いは 1922 年を境にバウハウスがドイツ表現主義から、突然、構成主義へと方向転換した当時のパウ

ハウス生の戸惑いに重なり、ツアーに参加した日本の生徒にとって既にしてバウハウス体験が始まるといった具合である。ベルリンからバウハウス発祥の地ワイマールへ。バウハウス関連施設の見学は無論のこと、かつてクレイやカンディンスキーが教鞭を執った旧バウハウス校舎（現バウハウス大学）の教室をお借りしてワークショップを続ける。夜は、当時バウハウス生が毎週土曜日に集った町外れのレストラン「イルムシュロスヒェン」での食事会となる。イッテンのモットー「祝祭」のささやかな追体験でもあろう。そしてデッサウに移動すれば、彼らを待っているのはデッサウ・バウハウス校舎の旧学生アトリエである。建築史上もっとも有名なテラスを持つ旧学生アトリエは、現在、宿泊施設として整備され、国内外からこの世界文化遺産建築を訪れる見学者に宿舎を提供しており、生徒たちはここに三泊する。宿舎にはもちろんエレベーターは無く、世界一美しいと云われるグロピウスの階段室カラーリングを見上げながら登り降りしながら、各階の共同シャワールームとトイレで暮らさなければならないが、階下のメンザ（学生食堂）で食事をし、毎日朝から晩まで教室での充実したワークショップに臨み、最終日には校舎内舞台でのパフォーマンスを仕上げる。短期間ではあるが、彼らは所謂研修旅行の域を超えて現代のバウホイスラー（バウハウス生）を生きているのである。

2019年、バウハウス100年を記念してワイマールとデッサウに新しい博物館が相次いで開館した。ワイマールのそれは規模は小さいながらも完全キュービックの銀色に輝く建物が古都の街角に異彩を放っている。デッサウの新バウハウス・ミュージアムは展示面積も大きく、オリジナル・プロダクトをはじめバウハウス教授陣とその学生たちの演習作品を並べるなど興味深い工夫が見られ、今後、パンデミック終息後に渡航が可能になればツアーは尚更に充実するであろう。トルステン・ブルーメの眼目は、上述のようなバウハウス舞台工房の歴史と経緯を踏まえて、殊にオスカー・シュレンマーの実験舞台に学びながら、現在、グラフィック・デザインやプロダクト・デザインあるいは空間デザイン（建築）を学ぶ学生・生徒たちが、自分の身体で抽象的フォルムを体験、把握するとは一体どのようなことなのかを問うことである。そこに歴史的価値を超えたバウハウス教育の現代的意味があることは云うまでもない。

参考文献

1. Magdalena Droste, Bauhaus, Taschen
2. 『バウハウス展』図録, 西部美術館, 1995年



トルステン・ブルーメ氏



バウハウス・ツアー 2015年



バウハウス・デッサウ校舎の旧学生アトリエ